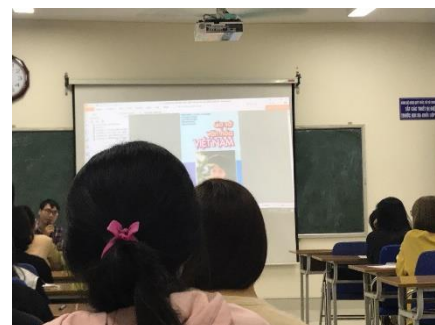


成果報告書

記入日 2021年 4月 11日

氏名 栗原ふみ	渡航先国名・地域名 ベトナム・ハノイ	所属機関 九州大学 人文科学府 人文基礎専攻 芸術学専修
研究テーマ：ベトナム近代美術にみる伝統とアイデンティティ —国民的画家ブイ・シュアン・ファイをめぐる—		
研究期間： 2020年 8月 ～ 2021年 1月		
研究成果（概要）		
<ol style="list-style-type: none"> ベトナム国家大学人文社会科学大学での受講を通じたベトナム近代史・ベトナム文化理解 ハノイの各図書館、アーカイブでの資料収集 画家の遺族、関係者へのインタビュー等のフィールドワーク 		
研究成果（詳細）		
<p>筆者は今回支援いただいた留学による成果として、主に以下の3点を挙げたい。</p> <ol style="list-style-type: none"> ベトナム国家大学人文社会科学大学での受講を通じたベトナム近代史・ベトナム文化理解 <p>留学先大学であるベトナム国家大学人文社会科学大学では、先方のご厚意によって複数の学科の授業を受講することを許可していただいた。歴史学科では「ベトナム近代における都市化の問題」、「ベトナム文化における異文化接触」、「ベトナム文化におけるジェンダー」、文学科では「1900年から1945年までのベトナム文学」を聴講した。また、さらなる語学力向上を目指して同大学ベトナム語・ベトナム文化学科による交換留学生向けのベトナム語オンライン授業にも参加した。筆者の専門であるベトナム近代美術史の授業はなかったが、ベトナム近代史や近代文学の授業から多くの示唆を得た。</p> <p>例えば、「ベトナム近代における都市化の問題」の講義において提示された「新農村」という概念は、近代化＝都市化と考えていた筆者の従来の考えを変え、ベトナムの近代美術や近代文学運動における農村と都市の関係性について新たなアプローチで分析するきっかけとなった。また、「ベトナム文化における異文化接触」の講義では、時に国際交流として、時に侵略や植民地支配といった形で行われる異文化の移入の歴史を、ベトナムではどのように解釈しているのかという視点からベトナム史を捉えなおすことができた。さらに、「ベトナム文化におけるジェンダー」の講義では、講師であるグエン・バオ・チャン先生とベトナム近代美術におけるアオザイを着た女性像というモチーフについて意見交換を行い、自身の研究への示唆を得た。一方文学科において受講した「1900年から1945年までのベトナム文学」では、近代美術とも関係の深い近代文学運動「自力文団」についてより詳細な知識を得るとともに、自力文団のメンバーの中でも南に亡命した作家と北に留まり続けた作家とでは講義中の扱いが異なることから、文化芸術の</p>		



人文社会科学大学での授業風景

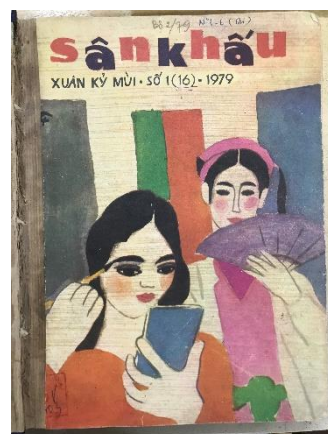
立ち位置がベトナム近現代の歴史的イデオロギーといかに絡み合っているのかという繊細な状況についても窺い知ることができた。

コロナ禍で留学生が自分一人、授業はすべてベトナム語という環境下で講義についていくのは大変であったが、講義に参加し知見を得るだけでなく、ベトナムの学生や先生方と交流し筆者の専門について意見を交わす中で、ベトナム近代美術史がベトナム国内であまり認識されていないというベトナム国内の学術的な課題も認識できた貴重な経験となった。

2. ハノイの各図書館、アーカイブでの資料収集

ベトナムの首都であるハノイには国家図書館や各大学の図書館、美術館等の施設が集中しているため、留学期間中はベトナム国内でしかアクセスできない資料の収集に力を入れた。

留学期間中最も多く訪問したのは、ハノイの中心地ホアンキエム湖近くにあるベトナム国家図書館である。国家図書館はベトナム国内でも屈指の規模を誇る図書館ではあるが、日本の国会図書館のように国内で出版された書籍が網羅的に収蔵されているわけではないので、資料の収集は常に複数の図書館・アーカイブを同時並行で巡りながらの作業となった。国家図書館での資料収集の成果としてまず挙げたいのは、雑誌「San Khau (舞台)」の調査である。1976年にベトナム舞台芸術協会によって創刊された「San Khau」は、その名の通りベトナム国内外の舞台芸術についてエッセイや論考が寄せられた雑誌であるが、日本国内では2,3冊ほどしか閲覧する機会がなかった。今回ブイ・シュアン・ファイ存命中に発刊された号を広く調査したことで、ファイが「San Khau」の表紙や挿絵を度々手掛けており、筆者の研究テーマでもある、ベトナムの大衆オペラチェオの役者を描いたファイの制作活動が誌面で特集されることもあったという事実が明らかとなった。記事の内容については今後さらに精査する必要があるが、ファイのチェオとの関わりや伝統芸術への深い造詣が舞台芸術界に広く知られていたという仮定が期待できる。そのほかにも、国家図書館では1950年代の全国美術展の画集、ファイも所属していたベトナム美術協会の協会誌、ファイに関する博士論文など、ファイの画業を明らかにするうえで重要な文献を収集することができた。



雑誌「San Khau(舞台)」
表紙(1979年16号)

国家図書館に加えて、ベトナム国家大学大学図書館ではベトナム作家協会機関誌「Van Nghe」アーカイブやファイの訃報を報じた1980年代の新聞を収集、社会科学図書館では1950年代のベトナム人美術家の展覧会図録を調査、ベトナム美術大学図書館ではベトナム近代美術史に関する卒業論文を閲覧した。

とりわけ印象深いのは、ベトナム美術出版社での資料収集である。編集長であるダン・ティ・ビック氏のご厚意で、初対面にも関わらず何時間も編集長室で雑誌「ベトナム美術」のアーカイブや過去の出版物を調査することを許可していただいた。美術出版社での資料収集によって、ファイだけでなくベトナム近代美術に関する貴重な論考や図版を多く入手することが可能となった。特に雑誌「ベトナム美術」の創刊号は、1980年代初頭の美術関係者がベトナム美術のアイデンティティについてどのように考えていたのかを窺い知るうえで非常に興味深い。



美術出版社での調査風景

今回の留学では、各図書館を利用するのに必要な学生証がなかなか発行されなかったり、やむを得ない理由で留学期間を短縮することになったりといった事情があったため、当初想定していた収集活動を完璧に行うことはできなかったが、今回得た資料収集のノウハウや繋がりをこれからの研究活動にも存分に生かしていきたい。

3. 画家の遺族、関係者へのインタビュー等のフィールドワーク

文献資料の散逸や不足が頻繁にみられるベトナム近代美術という分野においては、オーラルヒストリーの収集やフィールドワークは研究を行ううえで非常に重要な要素である。今回の留学期間中に実現することができたのは、筆者が研究する画家ブイ・シュアン・ファイの息子ブイ・タイン・フオン氏のパートナー、ヴィン夫人へのインタビュー、及びファイにチェオの舞台美術の仕事を紹介したチャン・フエン・チャンの息子チャン・キム・バン氏へのインタビューと氏所蔵のアーカイブ調査である。

ファイの遺族ヴィン夫人へのインタビューでは、ファイが美術を初めて本格的に学んだインドシナ美術学校での教育について保守的だと不満に思っていたという話や、ファイが公的な美術活動に参加することを禁止されていた期間、看護師だったファイの妻が病院で働くほか自宅で鍼治療の副業を行うことで何とか収入を稼ぎ、そのおかげでファイは画業に専念できたという話など、家族だからこそ知りえるエピソードを伺うことができた。また、ファイの制作活動とベトナムの伝統文化の関係性について、ファイはモダン



ファイ遺族のヴィン夫人訪問の様子

アートの代表的作家だと思われるが、ベトナムの伝統文化にも関心が高く、キム・ホアン村という伝統工芸村によく出掛けて着想を得ていたというエピソードは、筆者の研究テーマであるベトナム近代美術における伝統とアイデンティティという問題にも大きな示唆を与えるであろう。

一方、チャン・キム・バン氏の訪問では、氏が所蔵するアーカイブも拝見し、ファイがデザインを手掛けたチェオのパンフレットやファイの絵画作品を調査することができた。インタビューでは、ハノイチェオ劇団団長という党内でも高い地位にあったチャン・フエン・チャンが、なぜ当時党から冷遇されていたファイに舞台美術の仕事を紹介したのかという筆者の問いに対して、レジスタンスであった青年時代からの芸術家同士の友情がその後も相互扶助的なコミュニティとして機能していたことをご教示いただいた。そのような芸術家同士の親密なコミュニティの様相は、文献資料からだけでは決して見えてこない歴史といえるだろう。



チャン・キム・バン氏訪問の様子

そのほかにも、自らの研究だけでなく、ベトナムの現代美術のリアルな状況についても広く理解するため、筆者は現代アートの世界で活躍する Thu Kim Vu 氏や Din Sama 氏などのアーティストや、遠藤水城氏などキュレーターへのインタビューも実施した。今回留学期間が短縮となったためサイゴン調査の実現は叶わなかったが、今回培った経験と人とのつながりを今後も大切に、将来の研究活動にもつなげていきたい。

留学中の生活・研究でのトピックス

コロナ禍の留学生活

まず何よりも今回の留学において特異であったのは、コロナ禍で留學生を送ることになったという点である。筆者は語学習得のため交換留学期間に先んじて2019年11月にハノイに渡航していたため、コロナ禍で多くの学生が留学先に渡航できない状況の中、そのまま現地に滞在して留学を継続することができた。留学を継続できた要因は、それに加えて、ベトナム政府が極めて厳格な感染抑え込み政策を実行していたからである。ベトナムでも感染例が報じられるようになった昨年3月にベトナム政府はすぐさま国境を封鎖。市中感染を抑え込むためロックダウンも実行した。その後も感染者が一人でもできるとメディアで大きく報道され、接触者は数百人単位で隔離されるという徹底ぶりである。市民もその間政府の指示に従い、自ら感染防止対策を行う意識が非常に高かったように感じた。異国で一人生活する留学生としては戸惑う場面もあったが、日本とベトナムの政治体制や公共意識の差異を実感する経験となった。



コロナ対策を呼び掛けるポスター

ハノイの通勤通学事情

交換留学を開始するにあたって、渡航時より住んでいたアパートからの引っ越しを決断した。理由は写真の通り、ラッシュアワーの凄まじさである。当初住んでいたアパートは本来大学までバスで30分ほどの距離にあったが、授業初日はじめてラッシュの時間帯に通学したところ、その2倍以上の1時間半近くかかった。毎日このラッシュに巻き込まれるのは耐えられないと思い、すぐさま大学からバスで5分のアパートに引っ越したのは正解だった。実はバス停に行くために毎朝この大渋滞の大通りを横断歩道もなしに渡ることになったのだが、慣れると意外と苦ではない。その代わりに、ベトナムで慣れて油断したのかまさかの帰国後に交通事故に遭ってしまった。



大学前の通勤通学ラッシュ

今後の社会貢献

今回支援いただいて留学を実現できたことで、筆者は今後以下のように社会に貢献することを目指している。

1. 日越の文化交流の推進と研究への寄与

筆者は修士課程修了後、日本国内の美術館で働くことを目指しており、学芸員として勤務することになった暁には、展覧会でベトナム美術を積極的に紹介することで日越の文化交流を推進したい。また、その傍ら研究活動も続けることで、ベトナム近代美術史研究の発展にも寄与したい。

2. 日本に滞在するベトナムの方への支援活動

筆者が留学中、たびたび話題になったのが日本で困窮する外国人技能実習生の実態であった。筆者も留学中支援団体に寄付を行い、情報収集に努めるなど関心は持っていたが、帰国した今だからこそ、将来の良好な日越関係のためにも、日本に滞在するベトナム人コミュニティを支援する活動に参加しなければと考えている。引き続き寄付活動を行うとともに、筆者だからこそできる活動として、具体的には、ベトナム語による日本語教育のボランティアに参加することを考えている。